

キリスト道講演会（東京第9回）

## いと小さき者を顧み給う神

2010年11月14日（東京 法曹会館での最終回）

奥田 昌道

人それぞれで構わない 「龍馬伝」 生きる勇氣、力、希望 祈りと讃美（詩篇第10、12、34、146、147篇）  
砕けの霊（イザヤ書第57、58章） 幼子のような者（マタイ福音書第5、11、18、19、25章） やもめの息  
子を生き返らせる（ルカ福音書第7、18章） いと小さき者を顧み給う神（ヨハネ福音書第9章） 我々  
日本人は共感できる 祈り

### ●人それぞれで構わない

皆さま、よくおいでくださいました。この法曹会館を会場として、だいたい季節は12月あるいは11月の頃に2004年から年1回講演会を持ち続けまして、今回が7回目ということになります。7回続けて参加なさった方には皆勤賞を差し上げたいと思う。なかなかそういう方はいらつしやらないかと思いますが、よく続いてきたなと私は思っています。ひよつとしたら今回がこの会場では最後になるかもしれません。それは全く根拠のないことではありませんので、今日というこの会をととても大事にしていきたいと思えます。

皆さまに差し上げたこのプリント、これは私が作りました。切って貼るという作業はちゃんと正しい位置に貼ったつもりでも、できあがってみたら歪んでいたり、そういうふうになりますね。これが我々の日常だと思う。自分ではまともなことをやっているつもりでも、あつち向いたりこつち向いたり引つくり返ったり、そういうのが我々の常です。それはそれとして、主は喜んでくださるのではないかと思います。つまり、

「あまりいい恰好しなくていい、あるがままでいい」

と。自分でベストと思うことをやっていけば、足りないところは神さまが——我々にとつてはキリストですけれども——キリストが補ってください。考えてみたら、私なんか毎日毎日失敗という、「ああ、ここがまずかった」と思うことがかなりある。そうすると小さな自己嫌悪に陥ります。その自己嫌悪からきつと救い出してくださいるのはキリストでしかないわけです。自信満々で非のうちどころないと胸を張っている人は、ある意味で羨ましい存在ですけれども、そういう方は神さまから遠い。やはり、自分で

「このままではいかん、こんな自分では」

と知っている人間を神さまの方は、

「まあ、そう嘆かなくてもいい。人間は完璧なんてありえない」

と言って、肩をたたいて寄り添ってくださいるのが、私を今日まで導いてきてくださったキリ



ストというお方なんです。

よく私が自分の信仰のことを話しますと、

「先生はクリスチャンですか。カトリックですか、プロテスタントですか？」

と、まずそういうところから身の上を調べられる。私が信じているものは、そんな「宗教」だと思っていない。私にとっては、キリストというお方は本当に大事な大事な方なので、死んでいる方ではない。今生きて——姿は見えないけれども——生きて私を助け導き、指針を示し、

「一緒に歩こうよ」

と言って寄り添ってくださるお方なので、

「信仰という言葉は私にはピッタリしない、ピンとこない」

ということを申し上げている。そんなことを思っているのは私一人かも知れないけれども、

「人それぞれで構わないではないか」

というふうに思っている。

今日のお話は、昨年の講演は『「神の思い」と「人の思い」』という題ですが、その話の延長にあるものです。昨年の話はとてもよくできていると自分でも思っています。時間が足りなくて、始めの予定の十分の一くらいしかしゃべれなかったけれども、冊子（『「神の思い」と「人の思い」』2009/11/15キリスト道講演会）になつております。皆さん、ここでお受けとりくださつたと思います。その「はしがき」のところで、

「私はどういふつもりで聖書に取組んでいるのか、どういふつもりでキリストにしがみついているのか」

そういう私の思いというものを告白しておりますので、ぜひ味わっていただきたいと思います。つまり、特定の宗教ではない。

「こうでなくはいかん」

とか、そういう枠組みにはめられたくない。我々一人びとりはみな個性的な存在です。一人ひとりみんな違う。一人ひとりがそれぞれに自分の信ずるお方を、恋人を持つていい。たくさんはいけませんけれども（笑）。私にとってはキリストというお方は恋人のような存在、先生であり、救い主であり、導き手であり、すべてなんです。

スポーツの世界でもそうです。本当に自分が信頼できる指導者、コーチ、監督、そういった者に委ねて、その言葉どおり、導きのとおり委ねて歩んでいきますと、自分の中にある、自分でも気がつかないようなものを引っ張り出してくれて、それを花咲かしてくれる。つまり、そこでは本当に深い人格的な信頼関係というものがあろうと思います。これはもう学問の世界でも、芸術の世界でも、音楽であろうとその他いろんな世界で通用することだと思う。

正に人が生きる、生涯を送るという一人ひとりの人生がある。その人生という未知の領域



を我々は歩んでいるわけです。振りかえれば、過去という人生があります。けれども、将来に向かつては、それは目に見えない未知の世界です。そこに踏み出していくということにおいて、そういう導き手という方を持たないと、とっても不安ではないだろうか。私はやり切れないですね。

「自分だけでやれ。自分の力ですべてやれ。自己責任だ。お前は弱虫だ、そんなこともできないのか」

「はい、申し訳ありません。私は自分で何事も決められない優柔不断な人間です」

と、まあそう言つて頭を下げているような存在なんですけれども。ところが、このお方に出会つて、このお方に引つ張つていただいてからは、そういう変な迷いというものが消えていきました。相変わらず頼りない存在です。相変わらず気の小さい、つまらんこと（こたわ）に拘るようなそういう人間なんですけれども、委ねる方があるということは、本当に幸いなことだと思います。だから、私は学生にも、その他いろいろな方に申し上げるんです、

「それぞれ自分の委ねるべきお方を発見してください。そのお方に出会ってください

い。そのお方と一緒に皆さんの人生を花咲かせてください」

と。「聖書」というと、我々にとつてはとても遠い存在です。当然のことです。第一、旧約聖書はユダヤの歴史から始まっています。ユダヤの国というのは遠い国です。それから時代をご覧ください。2000年前のキリスト誕生が紀元で、それから始まっているわけでしょう。今は紀元2010年です。その前に紀元前1500年くらいの歴史を持っているわけです。その1500年ほどの歴史を記録しているのが旧約聖書です。もちろん、単なる歴史ではありません。そこには預言もあれば文学も入っています。いろんなものが入っていますけれども、その全体がユダヤ民族の一つの歴史、民族史といつていいと思うものになっています。

我が国だったら、古事記だとか日本書紀だとか、そういう古い時代について書かれた歴史書があります。そういう我が国の歴史書と比べると、凄いですよね、旧約聖書は。しかしながら、その旧約聖書というのは我々からすれば遠い遠い存在のものです。時代が違う、環境が違う、考え方も違う。そんなものが我々にとつて、どうして共感を呼ぶのだろうか。

新約聖書になりましたも、キリストを起源としておりますから、キリストの伝記、それからキリストの弟子たちの伝道の記録、パウロを筆頭とするお弟子さんたちのいろんな書簡、そして最後は黙示録が記（しる）されています。そういうものにしても、古い古い時代のものです。

しかし、そんなものを抛り所にしながら、この日本において現代という社会でそれに分け入り、導き手を捜し出していくというのは、とても一人の力ではできることではない。やはり、導き手というものが要るだろうと思います。私もいろいろ頭をあちこちにぶつけながら、だんだんと自分の聖書の読み方、自分でキリストに帰依（きえ）していく道、そういうものを——掴（つか）んだというか、掴まれたというか——はつきりしてきましたので、皆さんの前ではつきりと語ることができるわけです。



## ●「龍馬伝」

「キリストというのはどんなお方？」

と、皆さんは不思議に思われるとおもう。

「見たことないでしょ？」

「はい、見たことはありません」

「見たことのない方をなぜ信じられるの？」

と言うお方に対しては、私は申し上げたい。坂本龍馬<sup>りょうま</sup>、「龍馬伝」〔2010年に放送されたNHK大河ドラマ。主演は福山雅治〕はいい。皆さん、どう思われます？ その龍馬の生き方。私はあのドラマを見るまで余り知らなかった。でも、あの「龍馬伝」を見て、すごく龍馬という人間に惹かれます。何かまるで現代の人のように目の前にいる人のような感覚を持つ。

言うならば、イエス・キリストというお方も、この聖書をドラマ化して誰かが本当にあの「龍馬伝」の福山さんみたいな素晴らしい俳優さんがいて、イエス・キリストを演じてくれたら、みんなそれこそ、

「素晴らしい、素晴らしい」

ときつと言うにちがいない。残念ながら、そういうドラマはまだ作られていないようですけれども。旧約聖書ではあの「十戒」という映画とか、「ベンハー」とか、あんなのがありました。イエス・キリストそのものを取り上げているドラマというのはまだないようです。私は言うならば、龍馬に惹かれるように、まるで龍馬が実在の人物のように——非常に若くして亡くなりました——そのように、イエス・キリストという方が鮮やかに、生き生きと自分の目の前に浮かびあがってきている。そのお方に自分を託すわけです。

私は龍馬のどういうところが好きかということをメモしたものがあるので、始めにちよつとそれをお話してみたい。龍馬の言葉の中に——龍馬はいろんな人に出会います、長崎の芸者で隠れキリシタンとして描かれた「お元さん<sup>もとさん</sup>」だとかその他に——何と言っているか、

「みんなが笑うて暮らせる世の中をつくりたい」

と。それには世の中のしくみを変えないといけない。上士<sup>じょうし</sup>だ下士<sup>かし</sup>だ、何だかんだという身分社会を。人が人として尊重されている——外側のことで規律されているものを引っくり返して——「みんなが笑うて暮らせる世の中をつくりたい」と、こう言いました。

龍馬の姿を私なりにまとめますと、まず私心なき姿、わたし心がない。自分を常に捨ててかかっています。理想のために自分の命を惜しんでいない。どんな所へでも飛び込んでいく、体当たりして行く。そういう素晴らしい。つまり、目標に向かって命を懸けている。それから、人間としては非常に憐れみ深い、情け深い。そういうところにも惹かれます。

そして、私が最も惹かれるなかの一つとして、お元さんに対する態度です。あの芸者のお元さんは隠れキリシタンなんです。仕事の上では、何か幕府の隠密<sup>おんみつ</sup>みたいな形でスパイの片棒をかついでいるような立場でいながら、それはやはり自分で苦しんでいる。それで、いつ



もこつそりマリアさまを拝んでいるわけです。しかし、それは公には拝めない。それがとうとうばれてしまった。そして、迫害されて、逃げ回って、龍馬に助けられる。一方、龍馬は——イギリスの水兵が殺された、その下手人は龍馬だという疑いをかけられて——捕まえられる。その時に彼はイギリス公使の前に出て、それが無実だということがはつきりするけれども、その公使との問答の中で、

「私はイギリスを尊敬しています。素晴らしい国だと思う。自分はイギリスのような素晴らしい国に日本を変えたい。そのために自分を献げていく」

ということを申します。それに英国公使はすぐ心を動かされる。

「あなたのような立派な人間がこの国に、若い者の中にいる。これは素晴らしい」

と言って心を動かされる。もちろん無罪放免です。その時に龍馬は願い出たことが一つある。

「ひとつお願いがあります。お元さんをイギリスへ亡命させてやってほしい」

ということをお願い出る。お元さんという一芸者である女性が自分の心の悩み、痛みを一心にマリアさまに拝み、隠れクリシタンとして礼拝に参加し、そして祈りを捧げることによって、自分を保っている。その姿を龍馬はとても大事にしている。お元さんが船に乗ってイギリスへ向かいます。小舟に乗って本船に乗る。その小舟が波打ち際から離れていく時に、龍馬が言う言葉がある。

「お元さん、心ゆくまでマリアさまを拝むがよい。異国の神さまだといって、何で

日本で迫害しなくてはいかんのか。異国の神さまを拝む。それで心が安らかでいられるなら、それで救われるなら、それもいいじゃないか」

と。もちろん、龍馬は別にクリシタンでも何でもない。けれども、お元さんがマリアさまにすぎるといふことによつて心の平安をいただいている。必死になってマリアさまにすがって生きている。それをそのまま大切にしている。そのお元さんに対して、

「心ゆくまでマリアさまを拝んでいらつしやい。お前が行く国では、マリアさまを

拝むのを誰もとがめはせん」

と言って、送り出す場面がある。ああいう姿に私はすぐ心をうたれる。「宗教」というと他宗排撃、自分のところを絶対視する。宗教を持つている人は無宗教の人をさげすむし、無宗教の人は宗教を持つている人に対して偏見をいだく。宗派間では争いが絶えない。歴史を見ましてもそうです。ところが、この龍馬の姿というのはなんと美わしい素晴らしい姿かと思つて、私は共感するんです。

### ●生きる勇氣、力、希望

私がここでキリストのことを語るのも同じ気持ちです。人それぞれ皆違う。一人ひとりが、神さまの目から見たら、絶対的に尊い存在として顧みられている存在です。政治の世界は人々を束として、数で考えます。多数の幸せ、そのためには少数を切り捨てるといふことが平気

で行われる——「平気で」というと失礼ですが——やむをえない。ところが、神さまの世界はそうではない。九十九匹の健やかな羊をその場に置いてでも、迷い出た一匹を捜し求めてどこまでも尋ね求め、それを見いだしたなら、肩にかけて喜びいさんで帰ってくるという。

「さあ、喜んでほしい。失われていた羊が見つかったんだから」

と。これが神さまの御意<sup>みこころ</sup>です。あの「放蕩息子」の話もそうでした。お兄さんは品行方正で実に非のうちどころのない立派なお兄さんであつたけれども、弟は途中からぐれて、身代<sup>しんだい</sup>（財産の一部）をいただいて旅立って、すつからかんになつて、そして我に返って、みすぼらしい姿で帰ってくる。その姿をお父さんは見つけるやいなや駆けだして行つて抱きしめ、その喜びようはないわけです。それこそ飲めや歌えやの大騒ぎ。お兄さんは実に怒っていました。

「なんだ、こんな奴のためにこれだけの盛大な宴をはって、私のためには何一

つやってくれなかったではないか！」

という話がルカ伝15章に「放蕩息子のたとえ話」がある。そのように、一匹の失われた羊、一人の失われた魂、そういうものをどこまでも追ひ求め救いあげるといのが神の御意<sup>みこころ</sup>です。ですから、この世の価値観、この世の政治の中での価値観、あるいは社会での価値観というものと180度違うわけです。そういうことを一応、心にとめていまして、聖書を読みましても、全然共感を覚えないのではないかと思います。

今回、私がプリントに作りしたのは、今日の講演の題目である、「いと小さき者を顧み給う神」、そして講師の言葉というのがここに紹介されていますが、ちよつと読み上げてみます。

《神の意<sup>いしころ</sup>を体现したキリストは、福音書においていつも幼児や病める人、貧しい人や寄る辺なき人、この世の中では顧みられることのない人たちを大切にされています。現代においてもそうです。今も御言<sup>みことば</sup>と御霊<sup>みたま</sup>（聖霊）をもつて力づけ励まし、生きる勇氣、力、希望を豊かに与え給うお方に出会つてくださるようにと願っています。》

これが私の自然に出てきた言葉でした。この「いと小さき者を顧み給う神」という角度から、私は旧約聖書の中の詩篇、イザヤ書、そのあたりをずっと見まして、私の心にとまつた言葉を抜き書きして切り貼りました。それが皆さんのお手元の講演資料、聖書抜粋というわけです。ただ、これは新共同訳という、現在の一歩新しい口語訳から取ったけれども、それと文語訳聖書との間にとりどころ食い違いがある。それはおそらくヘブライ語というものの構造からくると思います。現在形と現在完了形とか、そういうものの区別がつかなくなったり、どこで切るのかわからなかったり、いろいろなことがあるからだと思ひますけれども、文語訳に慣れ親しんできた者からすると、所々もの足りない所があります。のみならず、違つてゐる所がある。それは私共にはどうしようもないことです。



ヘブライ語やギリシア語なんか私はできません。そういう人間はただただ翻訳にすぎるしかない。私のすぎる翻訳はドイツ語であつたりすることがあるけれども、せいぜいそのくらいです。そのなかのどれが正しいかなんて決められない。新共同訳を作られた方はそれなりの根拠をもって翻訳を作られたのでしようし、文語訳を作られた方もそれなりの根拠をもってお作りになったのだと思います。だから、そういう小さな差異は無視して、何かそこに共感できるものがあれば、それでいいのではないかと思います。

音楽でも、原曲は同じでも指揮者がどなたかによつて、ずいぶん違うそうですね。私のような音痴にはどなたも素晴らしいと思うけれども、誰が指揮するかによつて、交響楽はみな違うという。しいて言うならば、そういうことなのかもしれません。要は、共感できるものをそこに見いだしたらいい。さつき私は龍馬に共感すると言いましたが、それと同じように、聖書を読んでいて、

「あつ、これは私のことを言っている。私とこれはピッタリではないか」

と、そういうことを思えば、「それはもういただき！」と。それでいいのではないのでしょうか。我々は学者ではありません。一人として、市井しせいの人として、一日一日を一生懸命で生きていく人間にとつて、何か心を支え励まし、慰め包んでくれる、希望を与えてくれる、そういうものにでくわせば、それを自分のものにすればいいわけです。誰にも遠慮することはない。そういう気持ちで私はずっと聖書に接してきました。

### ●祈りと讃美（詩篇第10、12、34、146、147篇）

では、前置きはそのぐらいにして、さつそくこの詩篇という所から皆さんと一緒に味わっていきましょう。まず、この資料にそつて読み、味わい、それから若干違つているところを文語で紹介してみたいと思います。

詩篇は、時代的にはだいたいダビデの時代からイザヤの時代頃で、紀元前1000年から500年くらいの古い時代の作品であつて、しかも作者がわからないのが多い。「ダビデの歌」といっても、本当にダビデの作かどうかともわからないと言われています。ダビデの心で詠んだものだろうと言われますし、詩篇というのは詩ではありますけれども、何の詩かというところ、祈りの詩なんです。祈りであり讃美です、讃美歌です。我々の讃美歌も半分祈りでしょ。そういう神讃美であり、そして祈り、それが自ずと表れ出たもの。民衆の詩うたと言つてもいいと思います。日本では万葉集などというものが我々の心をうちますけれども、ユダヤの人たちにとつてそういったものだというふうにご理解いただいていいと思います。

全部で150篇あるけれども、その中から第10篇、12篇、34篇、146篇、147篇の五つを選び、その中のまた部分をここに切り貼りいたしました。それを読んでみます。では、詩篇第10篇です。

「<sup>12</sup>立ち上がってください、主よ。神よ、御手みでを上げてください。貧しい人を



忘れないでください。<sup>13</sup>なぜ、逆らう者は神を侮り、罰などはない、と心に思うのでしょうか。<sup>14</sup>あなたは必ず御覧になって、御手に労苦と悩みをゆだねる人を、顧みてくださいます。

私はまずここで心をうたれました。

「御手に労苦と悩みをゆだねる人を、顧みてくださいます」

という。他にゆだねるところがない人なんですよ。人にゆだねて、それで片付くなら神さまは要らない。ところが、人にもゆだねられない。人にも頼れない。誰も顧みてくれない。窮極のところは、

「神さま、あなただけなんです」

と、そういう心の叫びです。

「俺って不運やなあ、ついてないな」

とか。就職だとか、入学試験だとか、いろんなところで、「つきから見放されているわ」とか、不運というのがありますね。

不運な人はあなたにすべてをおまかせします。あなたはみなしごをお助けになります。……<sup>17</sup>主よ、あなたは貧しい人に耳を傾け、その願いを聞き、彼らの心を確かにし、<sup>18</sup>みなしごと虐げられている人のために、裁きをしてください。この地に住む人は、再び脅かされることがないでしょう。」（詩篇 10・12～18）

短い部分ですけども、ここで顧みられている方というのは、まず「貧しい人」でしょ。

「貧しい人を忘れないでください。御手に労苦と悩みをゆだねる人を顧みてください。不運な人をあなたは顧みてくださいます。みなしごをお助けになります。貧しい人に耳を傾け、彼らの心を確かにし、みなしごと虐げられている人のために裁きをしてください」

と。一貫して、正にさきほど講師の言葉の中で読み上げましたような、そういうこの世で顧みられない人たち——身分制の社会ではますますそうでしょ——そういう中でまるで見捨てられたような人たちの最後の拠り所は「エホバ」「ヤーヴェー」と呼んでいる「主」だったんです。「神さま」と呼んでいます、そのお方でありました。まだキリストはこの世に出ておられない。しかし、この詩篇の人たちはいかに神さまに対して信愛の情を持っているか。それに依り頼んでいるかということをよく伺うことができます。

次に、これは文語の方でどうなっているかをちよつと見ておきますと、

「<sup>12</sup>エホバよ起きたまえ 神よ手をあげたまえ 苦しむものを忘れたもうなかなかなければ悪きもの神をいやしめて 心中になんじ探り求むることをせいと  
いうや」



「神さまはこの悪者、自分のことを探り求めたりなさらない」というのが文語なんです。ところが、口語訳では、「罰などはない」という。結局は同じかもしれません。

「変なことをやっていても、神さまは罰しはしないよ」

と言って、神さまを侮あなづつています。それを文語では、

「探り求むることはせじ」

というふうな訳をつけています。それから、

「<sup>14</sup>なんじは見たまえりその残害そこないと怨恨うらみとを見てこれに手みてをくだしたまえり」

と、完了形になっている。それに対して、口語訳では、

「<sup>14</sup>あなたは必ず御覧になって、御手に労苦と悩みをゆだねる人を、顧みてく、だ、い、い、います。」

となっていますので、ちよつとここは文語と不具合な感じがします。17節の方は、

「<sup>17</sup>エホバよ汝はくるしむものの懇求ねがいをききたま、え、い、」

と完了形になっていますが、「何々してください」と現在形で書いているのが口語です。

また、18節は、

「<sup>17</sup>…その心をかたくしたまわんなんじは耳をかたぶけてきき<sup>18</sup>孤子みなしこと虐げらる者とのために審判さばきをなし地につける人おびやかしにふたたび恐嚇おびやかしをもちいざらしめ給わん」(詩篇10・12～18)

と。口語の方では最後のところは

「<sup>18</sup>…この地に住む人は、再び脅かされることがないでしょう。」

と。「この地に住む人」というのは、脅かされる側、被害者の側を言っているようなんですけれども、文語だったら、

「地につける人おびやかしにふたたび恐嚇おびやかしをもちいざらしめ給わん」

と、「地につける人」というのは、

「この地上の人があなた方を脅かしたり何か害を与えたりしないように」

というふうにも読める。こんなふうには細かくみればいろいろとありますけれども、太い線は、

「神さまはとにかく、寄る辺なき者、みなしこ、やもめ、その他この世で顧みられない人を常に顧み守り助け給う。それに対して、そういうものを苦しめる者、横暴なる者、それは必ず神の審きにあうだろう」

という、そういうった思いが込められていると思います。それから次の12篇、

「主は言われます。「虐げしいたに苦しむ者と、呻うないている貧しい者のために、今、わたしは立ち上がり、彼らがあえぎ望む救いを与えよう。」

「虐げに苦しむ者、呻うないている貧しい者を自分を守るよ」というのが12篇です。文語でみますと、こここのところも、



「<sup>5</sup>エホバのたまわく苦しむもの<sup>かす</sup> 掠められ貧しきもの 歎くがゆえに 我いま起<sup>たち</sup>てこれをその慕いもとむる平安におかん」

と。この「平安」というところは口語訳の方では、「彼らがあえぎ望む救い」というふうに、「救い」となっている。やはり「平安」「心の安らぎ」という方が私にはピンとくる。それから、<sup>7</sup>主の仰せは清い。土の炉で七たび練り清めた銀。<sup>8</sup>主よ、あなたはその仰せを守り、この代からとこしえに至るまで、わたしたちを見守ってくださいます。」

と。文語の方は、

「<sup>6</sup>エホバの言はきよきことばなり 地にもうけたる爐にてねり 七次きよめた<sup>しろかね</sup> 白銀のごとし<sup>たぐい</sup> <sup>7</sup>エホバよ汝はかれらをまもり之をたすけてとこしえにこの類より免れしめたまわん」

と。やはり文語の方が響きがいい、というふうな感じがいたします。

その次は34篇の方に参加しますと、ここでも少し文語と口語で当てている言葉が訳語でちがっているがあります。一番大きな違いは何かというと、まず口語で読みますと、

「<sup>16</sup>主は、従う人に目を注ぎ、助けを求める叫びに耳を傾けてくださる。<sup>17</sup>主は悪を行う者に御顔を向け、その名の記念を地上から絶たれる。<sup>18</sup>主は助けを求める人の叫びを聞き、苦難から常に彼らを助け出される。主は打ち砕かれた心に近いまし、悔いる霊を救ってください。主に従う人には災いが重なるが、主はそのすべてから救い出し<sup>21</sup> 骨の一本も損なわれることのないように彼を守ってください。」(詩篇34・16〜21)

文語との違いの大きなところは、今、口語で読みました、「従う人に目を注ぎ」という、この「従う人」を文語では、「義者」と訳されている。当て字は「義」という字です。「神の義」とか、「義人」とかいうあの義です。これを「ただしい」というフリガナをふつておりまして、

「<sup>17</sup>義者さけびたればエホバ之をききてそのすべての患難よりたすけいだしたまえり、<sup>18</sup>エホバは心のいたみかなしめる者にちかく在してたましいの悔、<sup>19</sup>頰れたるものをすくいいたもう<sup>20</sup> 主は災いが重なるが、主はそのすべてから救いだし<sup>21</sup> 骨の一本も損なわれることのないようにもうその一つだに折らるることなし」

これが文語なんです。「ただしきもの」と言われると確かに、

「私はちつともただしくないから、助けてもらえないわ」

と、こういうふうにいる人があるといけませんので、それで「従う人」という翻訳をされたのかもしれませんが。新約聖書の側からいいますと、人間は義人、神の前に義しいと言っている者は一人もいない。神さまの前に立てる人間は一人もいない。



「義人なし、一人だになし」

という。だから、この詩篇の中でこの「ただしき者」と言っているのは、その心を探れば、「神に従う人」。自分が「立派だとか立派でないとか」ではなくて、

「神さま、あなたに従わせてください。あなたにすがらせてください」

といって、「依り頼んでいく人」という意味で、共同訳では「従う人に目を注ぎ」というふうに翻訳されたのだらうと思います。あとは大体、同じなんです。そして、ここですううう人が顧みられるかというのと、「助けを呼び求める人」です。

「<sup>18</sup>主は助けを求める人の叫びを聞き、苦難から常に彼らを助け出される」

文語では、「たすけいだしたまえり」と完了形になっておりますけれども、「助け出される」とある。それから、

「<sup>19</sup>主は打ち砕かれた心に近くなり、悔いる霊を救ってください」  
これは文語訳では、

「エホバは心のいたまかなしめる者、たましいの悔顔れたるもの」

ですけれども、口語訳では、「打ち砕かれた心、悔いる霊」となっている。どっちにしても、神さまの前に立てない。いろんな運命に翻弄されたり、あるいは自分の人生の蹟きにあつて、自分の心がうちのめされ、自分の中に何も自分を支えるものがない。それで、

「主よ、あなたにすがる以外にありません」

という。詩篇の中には、もつと先の方へいきますと、

「神さまが本当の審きをなさるならば、あなたの前に立てる者は一人もありません。しかし、あなたには慈しみがあります、憐れみがあります。だから、その憐れみのゆえに我々を救い上げて、我々をあなたの御許へと助け出してください」

という言葉が第110篇ぐらいから出てきます。だから、やはり共通していることは、

「人は神の前には立てない」

ということです。正にルターはそういう思いで苦しんだ。人からは

「模範僧だ」

と言われたルターが神の審判の前に戦いてとうとう気絶してしまった。そこから始まっている。そして、自分の側の善さとか立派さではない。自分で神の心を完うしようなんて思うことと自分がもう畏れおおいことだと。

「ただ憐れみにすがり、恵みにすがって、導いていただいて、そしてやつと受け入れていただく。人間というのはそういう存在でしかない」というところにルターは気づくわけです。

「信仰によって義とされる」



というのはそういうことなんです。なにも

「立派な信仰だ、信心しているから大丈夫だ」

と胸を張れるようなものではない。私は「信仰」という言葉よりも「信心」という言葉の方が好きです。「信仰」と言いますと、何かいかにも立派にみえる。

「私には信仰があるんです。あなたは信仰がないでしょ」

と。そうじゃない。助けていただいたから、それにすがっている。船が沈没して海に投げ出されたら、荒れる波間にロープを、浮輪を投げてもらい、それに必死になつてすが。すぐすることはできる。すぐるだけの力はある。しかし、すぐるだけであつて、あとは引き上げてもらつて、「さあ大丈夫だ」と言われないと、自分は立つ瀬を持ちません、立つ場を持ちません。これが本当の人間の姿ではないだろうか。相対的に人と比べれば、

「私の方がちよつとは立派だ、あいつに比べれば私は」

とか、人間は比較する。すべて比較です。法律の世界でも「比較法」というのがありまして、「どの法はどの法と比べてどうだ」

とかすべて比較です。価値相対主義というのもそうです。神さまはそういうレベルではない。とか、そういうものではない。神さまからの目から見たら、超絶した世界にいらつしやるお

「どの山が高いか」

方が、我々地上で苦しんでいる人間を何とか救い上げたいという、その一念を持つておられる。それに気づくかどうか。

「それによらなければ、人間は救われっこない」

という、この自覚が必要ではないでしょうか。人間が編み出した宗教とか救いとかいうものは、せいぜいこの地上の世界の不幸を扱うレベルです。

「この神さまを信心したら病気になるへんで。どうや、信心しようやないか」

「あつちの神さまに頼んだんや、あつちの神さまを拝みに行こう」

とか、それも結構ですよ。結構ですけれども、そのレベルではない。

「こつちの神さまやつたら、商売儲かる。だから、行こう」

と。日本は「八百万の神さま」<sup>やおよろず</sup>が分業なさつていて、それぞれに願いを聴いてくださる。受験のシーズンともなれば、北野天満宮は受験生で満ちあふれると聞いてます。私は不思議でしょうがない。入学定員がありましょ。全部の願いを聞いてあげられない。プロ野球だつてそうです。キャンプを張ると、必勝祈願で監督以下みな選手は祈るわけです。優勝できるのは1チームしかありません。その皆の願いを聞いていたら、神さまは困つてしまうではないですか。でもまあ、言うならば、

「受験の時に病気になるしないで、実力を発揮できますようにお助けください。自分のあるがままを出せますように。その上で合格できれば結構です。力がありながら病気をしたり、変な間違いを犯したりしないように助けてください」



と。それだったらいいけれども、「合格を保証してください」なんて言ったら、神さまも、「ちよつとそれは違うよ、おかど違いだ」と言われるにちがいない。けれども、我々の身の回りというのは、

「そういう願い事を聞いてくれるのがいい神さま。それを聞いてくれなかつたら蹴飛ばせ」

と。つまり、神さまを自分の召使めしつかいにしている。そういうのが案外多いのではないでしょう。それはやはり我々が求める本当の崇高すうこうな神さまのレベルではないです。

我々が求めているのは、地上の生活も大事ですけれども、その地上の生活を越えて、絶対次元から語りかけ、絶対次元の質を与えてくださる生活です。地上の生活はせいぜい100年。115歳くらいが今、最高記録のようですね。それに近い人も中にはいらつしやいますよ、この中にも。でも、そういうものを越えて、たとえば地上の命は土に還ろうとも、身体を脱ぎ捨てた時には「永遠の生命」というものがきちんと備えられ、衣が与えられて、

「永遠に生きるんだよ。そこが本当の世界だ、地上はその序曲だ、トレーニングの場だ。地上でしつかりトレーニングをつめば、向こうの世界は輝いているよ」

と。何のトレーニングかというと、愛のトレーニングなんです。神さまに委ねるというトレーニングです。疑い深い人間が疑わないで一心に帰依きえしていく。導きに委ねていく。監督、コーチの言うとおりにやっていく。その信頼関係です。それに自分を委ねてコツコツと歩んでいく。そして、地上のトレーニングが終われば、向こうで待っていてくれる。キリストが待っておられます。キリストに在って召された人たちが待っています。キリストを知らない、向こうにいつから目覚めた人たちも待っていてくれます。私はそう思っているんですよ。

「信仰、信仰。信仰がなかつたら、向こうの世界でキリストの所へ行けない」

なんて誰が言い出したか知りませんが、幼いおさないです。幼児を見てください。幼児は信仰なんかない。でもキリストは本当に幼児を大事にしてください。『いと小さき者』を大事にしてください。主観的な信仰があるとかないとか、そんなものは大したことはない。

「身も魂もことごとくささげ、ただ憐れみにする他なし」

という聖歌(399番「カルバリ山の十字架」)があります。

「カルバリの十字架はわがためなり」

と。神さまの側で我々のために非常にご苦労くださって、これでもかこれでもかというように、神の道を差し示してください。それでも、人は躓いて躓いて、最後にはキリストをお遣わしになった。それをも殺してしまった。でも、それを引っくり返して、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のしていることがわからないでいる、駄々をこねているだけですから」

という、あのキリストの祈りの姿、担いの姿、これは龍馬以上です。龍馬はきつとキリストと今、握手して、



「奥田さんが今、法曹会館で話しているけれども応援しよう」  
なんて言ってくれていて、ここに居てくれているかも知れない。そういうことを私はリアルな世界だと思っている。

我々には見えない。見えないけれども、見えない向こうの奥に、見えない所に本当に輝いている本当のリアリティの世界を我々に差し示してくださったのがイエス・キリストというお方です。ご自分の生涯を通して、なによりもご自分の神に対する絶対帰依のあの姿を通して。そして、人に対しては絶対愛ですね。絶対愛ですよ、人を差別なさらない。キリストはどんな人が嫌だったかという、偽善者です、パリサイ人です。己を高しとし、人を蔑み、審いていくという、そういう根性をキリストは嫌われた。これは神の国では通用しない。神の国で通用するものはどういうものかということを経キリストは表してくださった。

今日プリントしてきました言葉もそれと通ずるものがここにあると私は思っております。そんなことで、もう少し先へ見ていきましょう。詩篇146篇、

「6……とこしえにまことを守られる主は、<sup>7</sup>虐げられている人のために裁きをし、飢えている人にパンをお与えになる。<sup>8</sup>主は捕われ人を解き放ち、主は見えない人の目を開き、主はうずくまっている人を起こされる。主は従う人を愛し、<sup>9</sup>主は寄留の民を守り、みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる。」(詩篇146・6～9)

それから147篇にいきますと、

「<sup>8</sup>主は天を雲で覆い、大地のために雨を備え、山々に草を芽生えさせられる。<sup>9</sup>獣や、鳥のたぐいが求めて鳴けば、食べ物をお与えになる。

いいですね、人間だけを顧みておられるのではない。こういうふうに「鳴く子鳥」までも、動物たちをも神は大事に思ってください。次が面白いでしょ、

<sup>10</sup>主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく、人の足の速さを望まれるのでもない。<sup>11</sup>主が望まれるのは主を畏れる人、主の慈しみを待ち望む人。」(詩篇147・8～11)

という。私はランニングをやっているでしょ。だめなんですよ、今ちよつと足を痛めまして、昔のように跳ぶように走れない。皇居の周りを走りましても、ずいぶん時間がかかってしまう。元気な時は25分で一周していたのが、今はなんと35分もかかっている。ここへきまして、

「人の足の速さを望まれるのでもない」  
と書いてある。なにも100メートル10秒で走れなくてもいい、ゆっくりでもいいと。自分の足で歩く、自分の足で走れなくなっている。

「<sup>10</sup>主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく、人の足の速さを望まれるのでもない。<sup>11</sup>主が望まれるのは主を畏れる人、主の慈しみを待ち望む人。」



これで、皆さん、安心して下さいね。速いランナーである必要はないということです。

### ●砕けの霊(イザヤ書第57、58章)

それでは次にイザヤ書へ入ります。これは「第三イザヤ」と申しまして、さきほどの小冊子『神の思い』と「人の思い」の39頁で第三イザヤのことにちよつと触れています。

《このイザヤ書57章は、第三イザヤ書の中のもですが、56章〜66章が第三イザヤ書と呼ばれており、紀元前587年から538年にわたるバビロン捕囚から帰還した後、かなりの時を経て、書かれたものとされています。この57章は、第三イザヤの預言の言葉です。》

と、ここを引きながら書いております。この第三イザヤ書の57章14節、15節、見出しは「<sup>へりくだ</sup>謙る者の祝福」とあります。

「<sup>14</sup>主は言われる。盛り上げよ、土を盛り上げて道を備えよ。わたしの民の道からつまずきとなる物を除け。

「<sup>15</sup>バリアフリー」というのがそうなんです。ちよつと段差があるとすぐ、ご老人の方は躓<sup>つまず</sup>いて転ぶ。転びますと骨折する。大変なんです。この中かなりご高齢の方もいらつしやるので、本当にくれぐれも気をつけてください。ここを読んだら、そんなことを連想します。

<sup>15</sup>高くあがめられて、永遠にいまし、その名を聖と唱えられる方(神)がこう言われる。わたしは高く、聖なる所に住み、打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる。」(イザヤ57・14〜15)

神さまが宿つてくださる魂は「打ち砕かれて、へりくだる霊の人」で、高ぶる霊ではない。砕けの霊、謙りの霊である。この「打ち砕かれた心」というのは、私の理解では二様にとれると思う。自分の内面が実に謙虚であるという、そういう砕かれた魂と、それからいろんな運命に翻弄されて、肉体的にもヘトヘトになって、ペシャンコにされてしまったという、その結果として心がしぼんでしまっているという、両様にとつていいと思う。どちらにせよ、自分の中に拠<sup>よ</sup>り所を持たない、砕けの魂、謙りの魂、そういう所にこそ神が宿り給う。最高の所におられる神さまは、一番どん底に下つてくださる。これ以上のどん底はないところへ来てくださる。そして、抱きかかえ担い上げてくださる。これが神さまの御意<sup>みこころ</sup>なんです。それを具体的に示されたのがイエス・キリストです。

次のイザヤ書58章に行きます。イスラエルの民の嘆きの言葉がまず出てくる。

「<sup>3</sup>何故あなたはわたしたちの断食を顧みず、苦行しても認めてくださらなかつたのか。見よ、断食の日にお前たちはしたい事をし、お前たちのために勞する人々を追いつく。<sup>4</sup>見よ、お前たちは断食しながら争いといさかいを起こ



し、神に逆らって、こぶしを振るう。お前たちが今しているような断食によつては、お前たちの声が天で聞かれることはない。<sup>5</sup> そのようなものがわたしの選ぶ断食、苦行の日であろうか。葦<sup>あし</sup>のように頭<sup>こうべ</sup>を垂れ、粗布<sup>あらぬの</sup>を敷き、灰をまくこと、それを、お前は断食と呼び、主に喜ばれる日と呼ぶのか。

つまり、形だけの断食をやっているけれども、実生活では、人を虐<sup>しいた</sup>げ、神さまの御意<sup>みこころ</sup>に沿わないことばかりを一方でやっておきながら、形だけ

「今日は断食の日だ、断食の月だ」

と言って、難行苦行のようなものをやっている。そういうことに対する厳しい批判なんです。

<sup>6</sup> わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛<sup>くわく</sup>を断ち、軛<sup>くびき</sup>の結び目をほどいて、虐<sup>あづかる</sup>げられた人を解放し、軛<sup>くびき</sup>をことごとく折ること。<sup>7</sup> 更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまざま貧しい人を家に招き入れ、裸<sup>はだか</sup>の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。<sup>8</sup> そうすれば、あなたの光は曙<sup>あけぼの</sup>のように射し出で、あなたの傷は速<sup>すみ</sup>やかにいやされる。あなたの正義があなたを先導し、主の栄光があなたのしんがりを守る。<sup>9</sup> あなたが呼べば主は答え、あなたが叫べば、「わたしはここにいます」と言われる。軛<sup>くびき</sup>を負<sup>お</sup>わすこと、指をさすこと、呪いの言葉をはくことを、あなたの中から取り去るなら、<sup>10</sup> 飢えている人に心を配り、苦しめられている人の願いを満たすなら、あなたの光は、闇の中に輝き出で、あなたを包む闇は、真昼のようになる。<sup>11</sup> 主は常にあなたを導き、焼けつく地でああなたの渴きをいやし、骨に力を与えてくださる。あなたは潤<sup>うるお</sup>された園、水の涸<sup>か</sup>れない泉となる。」(イザヤ58・3-11)

この第三イザヤの58章の、

「私が選ぶ断食とはこういうことだ」

という、その言葉と、マタイ伝25章の「終わりの日」に神さまが羊と山羊<sup>やぎ</sup>のように人間たちを二種類に分けて、羊は右に山羊は左にお分けになる。羊の部類に入れられた人に対して大変な祝福がもたらされる。その祝福の言葉は次のようなものでした。

「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。<sup>35</sup> お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴<sup>かわ</sup>いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、<sup>36</sup> 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」(マタイ25・34-36)

これが今読みましたイザヤ書58章の「私が選ぶ断食はこうだ」というのとピッタリなんです。そして、このマタイ伝によりますと、こういうふうな貧しい人、苦しんでいる人、飢えている人、裸の人、そういう人たちに親切<sup>ねんじ</sup>に懇<sup>ねん</sup>ろにしてくれたということは、



「実は私にしてくれた。私がそういう人の姿を借りてあなたの前に現れたのだよ」

という、そういう心なんです。だから、やった人は

「いつ、あなたさまにそんなことをしましたか。そんな覚えは全くありません。身に覚えがないことです」

と言っているけれども、神さまの側は、

「こういう貧しい人の一人に憐れみ深いことをしてくれたのは、実は私にしてくれたんだ。だから、天国で大いなる祝福を受けなさい」

と。これなんです。目の前に本当にキリストが現れたら、「あつ、どうぞ、どうぞ」と人は言うかもしれない。あるいは、もう一回十字架につけて殺すかもしれない。それはわかりませんけれども。とにかく、神さまは見える姿で現れます。そういう虐げられている人、苦しんでいる人、病に悩む人、飢えている人、裸でいる人、そういう人たちに憐れみ深い行為をする。あの「善いサマリア人」(ルカ10・25〜37)がそうでした。

「そういうことが実は神さまご自身、キリストご自身に対してしたんだ」

というふうに言ってくださる。パウロがクリスチャンを迫害した時にも、白昼現れて、パウロはぶつ倒されました。

「なんぞ、我を迫害するか!」

と言われた。要するに、

「クリスチャンたちを迫害するのは、私に対する迫害だ」

と、パウロにイエスは現れて仰った。旧約聖書の「箴言」<sup>しんげん</sup>という言葉の中にも出てきます。

「貧しい人を顧みるのは神さまにそれをしている。逆に、貧しい人を虐げる<sup>しいた</sup>のは神さまを侮<sup>あなづ</sup>っているんだ」

と、そういう言葉が箴言という中に出てきます(箴言14・31)。そのようにして、人は見かけではわからない。しかしながら、その心を見ておられる。

「いと小さき者を侮る者は神を侮っている。いと小さき者にしてくれた善き事、善き業<sup>わざ</sup>は実は私にしてくれたのだ」

と。これが神さまの御意<sup>みこころ</sup>なんです。それをキリストは身をもって表された。そういうふうには私を受けています。「貧しい者らへの福音」という。

「主は私に油を注いだ。主なる霊がわたしをとらえた。わたしを遣<sup>つか</sup>わして貧しい人に善い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、繋<sup>つな</sup>がれている人には解放を告知させるために」

と。これはルカ福音書におきましては始めの方に、

「会堂でイエスが聖書をお取りになって、イザヤ書を開かれ、そこでこの所



を読みあげられた」

というのが出てきます。そして、

「この言葉はあなたが今、耳にしたその時に成就<sup>じょうじゅ</sup>したのである」

と言われました。即ち、イエスはこの言葉を自分についての預言として受けとられた。しかも、「今、既に成就している」という。「私に油を注いだ」というのは、

「聖霊を注がれた、神の霊が私をとらえた」ということです。

「私をつかわして貧しい人に福音を伝えさせるために、打ち砕かれた心をつつみ、捕らわれ人には自由を、繋<sup>つな</sup>がれている人には解放を告知させるために」と、こういうふう<sup>2</sup>にイエスは引用されました。

●幼子のような者 (マタイ福音書第5、11、18、19、25章)

次に、新約聖書のマタイによる福音書から引きます。第5章、これは有名な所です。

「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。<sup>2</sup>そこで、イエスは口を開き、教えられた。

3「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

4悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

5柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

6義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

7憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

8心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

9平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

10義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

11わたしのためにのしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口<sup>あくこう</sup>を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。

12喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」「(マタイ5・1～12)

これは大変有名な所ですね。

「幸いなるかな、心の貧しき者」

これは「霊の貧しい人」ということ。ここで「幸いだ」と言われている人たちが拾ってみますと、「心の貧しい人」、これは霊の貧しい、つまり



「これだけはわがものというものを持たない、神さまの前に心がからっぽである」

ということ。それから、悲しむ人々、柔和な人々、義に飢え渴く人々、憐れみ深い人々、心の清い人々、平和を実現する人々、義のために迫害される人々。皆この世的にはあまり幸せそうでない人たちがここにあげられている。これはキリスト・イエスご自身の心の告白です。

「私はこういう者だよ」

という告白であると同時に、それと共通なものを持つている人たちに対する呼びかけでもある。

「悲しむ人」という。イエスはご自分では悲しんでおられないと思うけれども、やはり悲しむ人に出会々と、それと一つになってしまう。人の悲しみを自分の悲しみとして受けとってしまう。ラザロが死んで、マリアが悲しんで泣いていると、

「イエスは涙を流された」

と書いてある。だから、人の痛みとか苦しみを自分のそれとして、からだで受けとつてしまうという、それがイエスという方のお姿だと思います。

姦淫で捕らえられて引つ張りだされてきた女性を見て、イエスは裁かなかったでしょ。

「石を投げ打つ資格ある者がまず石を打て」

と言って自分はまたしやがみこんで、黙って地に書いておられた。人々が立ち去った後、

「もう誰もいないのか？」

「はい、誰もごいません」

「私もあなたを罰することはしない。あなたを罪に定めることはしない」

と。姦淫の現場で捕らえられた。姦淫の現場というのは確かによくない。けれども、何かそういう境遇に陥ってしまった。そして、ドヤドヤとその中に踏み込んできた人たちによって無理やりに朝、夜明け方に人々の前に引つ張りだされてくる。何たる恥辱ちじよくであるか、屈辱であるか、痛みであるか。その姿にイエスは同情してしまつておられるのではないだろうか。

「ひつ捕らえてくる人はそれほど立派な人なのか。他人を鞭打つて、自分は清い、

自分は正しいと言えるのか。もし本気でそう思うなら、石を取つて打つてごらん」

と。もし石を打とうとしたら、イエスはその前に立ちはだかれたのではないかと思う、弁慶べんけいの仁王立ちにおうみたいにな。

「私はこの女性を守る」

と。でも、誰も石を打てなかった。ああいう姿にまた私はホロリとしてしまう。共感するんです、何とハートの深いお方であろうかと。いろんな人がいろんな悲しみを持っています。その悲しみを本当に担つておられると思います。

それから「柔和な人」、イエスは本当に柔和な人です。「義に飢え渴く人」。不義がまかり通つていたユダヤ社会でした。その義に飢え渴く人もいたと思います。それから、「憐れみ深い人」。



「心の清い人」。これは神さま以外にイエスを満たすものはなかった。神さまだけがイエスの心に映っていた。純一です。幼児の心こころというのはそうでしょうね、何をするにも夢中である。我を忘れてそれにぶつかって行っているその姿。これが「心の清い」姿でもあります。

「その人は神を見る」

という。神さまだけを求めている人には神さまが映ってくる。それから、もちろん「平和を実現する人」、そして「義のために迫害される人」のことを詳しく書いてます。

「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。」

と。先の龍馬伝の「お元」さんがそうですよ、マリアさまを拜んでいるということで迫害される。クリスチャン迫害というのが日本でもありました。要するに、当時の政治にとって邪魔なものは全部抹殺する。抹殺する前に自分も本当に、

「どんな神さまなのか、お元さんがすぎる神さまってどんな神さまなんだ？」

と、その身になって考えてくれればいいのにと、私は思う。当時の宣教師たちのように侵略の手先になるのはよくない。ヨーロッパの植民地政策の一環として遣わされてきたのかもしれないけれども、純粋な信仰を持っている人をなぜ迫害するのかと、今から思えばそう思う。この国ではこういった純粋な信仰を持つ人は、とかく迫害される、除け者にされる。その傾向はあるのではないだろうか。職場で、

「私はクリスチャンです」

と言ったら、皆さん、

「ああ、それはいい、素晴らしいね」

と言って、誰も拍手してくれませんか。みなザワザワして、何か異様な人種であるように思われるのではないでしょうか。私なんかは大学の授業で、始めの大教室で講義をやる時にまず自己紹介して、

「私はキリストの弟子である。キリストに従う」

と言うと、ザワザワする。そしてその後で個人的に、

「先生はよっぽど辛いことがあったんでしょうね!？」

と、そういうふうに関われるんです(笑)。まず、日本の社会で、職場で、

「私はキリストを信奉しております。キリスト第一で生活しています」

と言ったら、そんなに無条件には受け入れられないと思います。けむたい。そう思われるかもしれません。ですから、ここで、

「私のためにののしられ、迫害され、身に覚えのないこととでさんざん悪口を浴びせられる、

それほどひどい目に私は遭あっていませんけれども、



そんなときには喜べ喜べ」

と言つてくださっている。

我々と隣り合つて我々を苦しめている国。北から言いますと、ロシア、北朝鮮そして中国。これらの国は体制として無神論です。神さまを信じない国です。アメリカやヨーロッパは植民地政策を、植民をやつたりいろんな酷いこと(ひどい)もやってきました。でも、少なくとも神さまに逆らわない信条の国でしょ。ところが、今我々を苦しめている国々というのはみな、詩篇でいうと、神に逆らう国なんです。不思議なことです。我々はそれに対して何をもつて身を守るのか。もはや武力ではない。

「核を持つべきだ」

という勇ましい議論も出てくるんです、今は。そうじゃない。やはり我々はこの詩篇の叫びのように、

「主よ、あなたは神を誇る者、横暴なる者、そういう者を決してそのまま野放しになさるようなお方ではありません。義の神さまです。虐げられて(しいた)いる者、踏みにじられる者、その者を顧みてくださいます」

と。今こそ我々はそういう祈りを本当に捧げて祈るべきではないだろうか。そう私は思う。あの小つぽけなユダヤの国は周囲の国々に脅かされて(おびや)いた。イエスの時代にはローマの属国でした。

「ローマの支配から本当の自由を勝ち取つてほしい」

というのが人々の願望だった。けれども、イエスはそれをしなかった。洗礼のヨハネも失望した。

「来るべき方はあなたですか。もつとあとに別な方を待つべきですか?」

と。ローマの支配を脱却して、あのダビデ王国を再建してくれる、そういう救い主。地上的な意味の解放者、それを当時のユダヤの人々は求めていた。ところが、イエスはそうではなかった。だから、殺されてしまったでしょ。そういう意味で、マタイ伝5章というのは今でも我々の心に銘記(めいき)すべき、そしてイエスと一緒にこの祈りを祈るべき、そういうイエスの心の叫びではないかという思いが私にはしている。

けれども、始めから申し上げてますように人それぞれです。人はすべて自由にものを考え、信ずるものを持つことができる。今の世の中、確信をもつて「私はこうだ」というものをそれぞれ見いだして、それを訴えていつていただければ、それで充分です。少なくとも利害打算では動かない、これが大事ではないかと私は思っている。いや、余計なことを言つたかもしれない。

その次へいきます。マタイ伝11章。「わたしのもとに来なさい」という見出しで、

「<sup>25</sup>そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめた



たえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、<sup>26</sup>幼子おさなごのような者にお示しになりました。<sup>27</sup>そうです、父よ、これは御心に適かなうことでした。<sup>28</sup>すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかに、父を知る者はいません。<sup>29</sup>疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。<sup>30</sup>わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの輓くびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。<sup>31</sup>わたしの輓は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:25-30)

この言葉が発せられたのは、マタイ伝によりますと、イエスはいろいろ伝道なさったけれども、人々はイエスの心を心として受けとつてくれなかった。そして、嘆き節が出てくる。

「コラジンよ、災いだ。ベトサイダは災いだ。もしもソドムとゴモラで、あなた方が聞いたことが語られたら、きっと彼らは悔い改めたにちがいない」

という嘆きの言葉がずっと出てきまして、突如として、この25節が始まっている。

「<sup>25</sup>…イエスは天からの声に應えられて次のように語られた。天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、

本当の御国の真理とあなたの心を、「隠して」というのは、彼らは受けとらなかつたということ。だから、彼らには開かれなかつた、隠れていた。

幼子おさなごのような者にお示しになりました。<sup>26</sup>そうです、父よ、これは御心に適かなうことでした。<sup>27</sup>すべてのことは、父からわたしに任せられています。父よ、あなたのほかに私を知ってくれる者はなく、また私が示そうと思う者のほかに、神さま、あなたのことを知ってくれる者はいません。

私と何か共通項を持つ者だけがあなたを知り、私を理解してくれるのですと。

<sup>28</sup>疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。<sup>29</sup>わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの輓くびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。<sup>30</sup>わたしの輓は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:25-30)

「一緒に苦労しよう、一緒に歩いて行こう」という呼びかけです。なんと慰め深いことかと思えます。それから飛びまして、18章の所に弟子たちとイエスのコントラストが表れている。

「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と言った。<sup>2</sup>そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、<sup>3</sup>言われた。「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」(マタ



イ18・153

「心を入れ替えて子供のようになる」というのは、「先入観を捨て去って」ということではないかと思う。大人はたくさんさんの経験を、たくさんさんの知識を積み重ねてきて、それがいつぱい詰まっていますから、神さまの言葉が来ても、跳ね返してしまふ。まず自分の判断が先立つて、神の言葉を裁くわけです。自分で取捨選択して、都合のいいものは受け入れるけれども、都合のわるいものは退ける。子供はそうではない。100%に受け入れる。真っ白ですから。だから、騙しやすい。子供をだますやつは絶対に救われないと私は思う。今だって「オレオレ詐欺」とか、生活保護を身代わりになつてやろうと言つて騙すやつがある。立派な大人の方々には、

「先入観を捨て去つて、自分を何者とも思わないで、白紙になつて、神の御意を、みことば御言を受け入れてちょうだいよね」

というお気持ちだと思う。それが

「心を入れ替えて子供のようにならなければ決して天の国に入ることはできない」

ということ。だいたい、弟子が

「誰が一番偉いか」

なんてやっているんですから。イエスの十字架の苦難を示されたあとなんだ。

「道々、お前たちは何をしゃべっていたのか？」

と聞かれたら、これなんですよ、「誰が一番偉いか」と。だから、イエスはがっかりされたと思う。それでこういうことを仰つたわけです。

「<sup>4</sup>自分を低くして、この子供のようになる人が天の国でいちばん偉いのだ。  
<sup>5</sup>わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」

と。10節から、この子供たちのこと、また信仰という面でもまことに小さき者、そういった小さき者たちのことを言われています。

<sup>10</sup>これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」(マタイ18・4〜10)

つまり、天使たちは子供のことを守っている。何かあれば、すぐ神さまに

「助けてやってくださいね!」

と、執り成しの叫びを発しているという。こういうところは、私は好きなところですよ。

私の孫の介助犬というのがもう20年近く前から授かりました。上の子は昨年亡くなつたけれども、下の子は今17歳でまだ生きています。筋ジストロフィーという重い病を背負つて、



身体はまことに不自由の極みです。介助犬が与えられた。実に忠実なんですよ。介助犬というのは、いろんな手助けをしてくれるというのが本当の介助犬ですけども、私の所の介助犬はお友達です。なにもそういう意味で助けてくれない。また助けてもらおうとも思っていない。ただ、常に待機をしている。たとえば、ちよつと「お父さん!」とか「お母さん!」とか、子供が何か呼びかけたい。そういう気持ちで何か声をかけますね、小さな声で。そうすると、犬が

「ワンワンワン、ワーン!」(ご主人さまが大変ですよ!)

というわけで吠える。それから、お父さんが子供をお風呂に入れる時、ちよつとお風呂から呼ぶ。小さな声なんです。そうしたら、犬が

「ワンワンワン、ワーン!」(お呼びですよ!)

と。そういう、自分の出番はいつかいつかと思つて、絶えず待機している。そういう姿、これがいうならば、天使たちが小さな子供たちのことをそのように心にかけて、

「すわ、この子の一大事!」

といつて神さまを呼び起こす。そして神さまは、

「お前、行つて助けてやれ」

と言われたら、助けに出動する。そういった情景を私は連想する。だから、小さな子供というのは決して、弱いようですけども、ちゃんと守られている。そういう小さな子供が災いにあうということは、本当に不幸なことですけども、そういう魂は必ず向こうの世界でもの凄く祝福の中に抱きとられているにちがいないと、私は信じています。

「11人の子は、失われたものを救うために来た。<sup>12</sup>あなたがたはどう思うか。あ  
る人が羊を百匹持つていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に  
残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。<sup>13</sup>はつきり言つてお  
くが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のこ  
とを喜ぶだろう。<sup>14</sup>そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、  
あなたがたの天の父の御心ではない。」(マタイ18・11〜14)

それでは、次のプリントの方に入ります。マタイ伝第19章13節、やはり子供のことがここに書かれています。

「<sup>13</sup>そのとき、イエスに手を置いて祈つていただくために、人々が子供たちを  
連れて来た。弟子たちはこの人々を叱つた。

「こら、先生の邪魔をするんじゃない。子供なんかはあつちへ行け、あつちへ行け!」  
というような調子でしょうかね。

<sup>14</sup>しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに  
来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」<sup>15</sup>そ

して、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。」(マタイ19・13〜15)  
そして、マタイ伝第25章、

「<sup>35</sup>お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、<sup>36</sup>裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢<sup>ろう</sup>にいたときに訪ねてくれたからだ。」<sup>37</sup>すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。<sup>38</sup>いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。<sup>39</sup>いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』<sup>40</sup>そこで、王は答える。『はつきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

文語では「いと小さき者」と翻訳されています。「いと小さき者を顧み給う神」ということ。そして、41節からはその逆のことです。

「してくれなかったのは、実は私にしてくれなかったのだ」というのが41節から出てきます。そして45節に、

<sup>45</sup>そこで、王は答える。『はつきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』<sup>46</sup>こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』(マタイ25・35〜46)

と。こういう締め括りになっています。以上がマタイ伝からの引用です。マルコ伝はマタイ伝と重なるところが多いものですから省略しました。

●やもめの息子を生き返らせる(ルカ福音書第7、18章)

ルカの福音書からは2箇所、7章と18章をとって参りました。この7章は「やもめの息子を生き返らせる」という見出しがついています。

「<sup>11</sup>それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。<sup>12</sup>イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺<sup>かん</sup>が担<sup>かつ</sup>ぎ出されるところだった。その母親はやもめであつて、町の人が大勢そばに付き添っていた。<sup>13</sup>主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

「もう泣かなくともよい」と、これが単なる言葉だったら、空しいですよ。

「泣かんでいいよ」



「そんなこと言われたって、泣かずにおられましようか」

というのが我々の答えですね。ところが、イエスが「泣かないでもいいよ」と仰るのは、「そのようにしてあげるから」

という保証付きなんです。イエスの言葉は全部、保証付きです。きつきの

「悲しんでいる人たちは幸いだ」

とありました。「私が慰めてあげるからね」というのがくつついていいるんです。

「私が慰めてあげる。私と悲しみを共にしよう。そうしたら、大丈夫だ」

と、そういう常にプラスの言葉が続いていますから、そこを読みとってください。教訓では決してありません。だからここでも、

「もう泣かなくともよい。私があなたに解決を与える、救いを与えるから」ということ。

<sup>14</sup>そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。

イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。」(ルカ7:11<sup>14</sup>)

12歳の女の子を癒された時もそうでしたね。ヤイロの娘が死んでいた。イエスは、

「眠っているだけだ」

と、手をとって、

「タリタ、クミ！」(娘よ、起きよ！)

と言われたら目がパッチリ開いたというお話が出てきます。本当にイエスというお方は凄にお方です。そんなのを今やれと言われたって、我々はとてもできない。これは全部、徴<sup>しるし</sup>です。

「神の御意<sup>みこころ</sup>とはこういうもんだよ。天国はこういうところだよ」

と。イザヤ書でいいますと、35章にその祝福された場面が出てくる。それをイエスという方はあの短い生涯の中で実を現して、

「神の国はこういう国だ。今、地上では悲しみが去らないけれども、本当にそういう時がやってくる。それを信じて、神さまに自分を委ねて、御意にかなう生活をしていきなさい。苦しみはしばしであって、喜びは永遠だから」

と。ところが、群衆はそれを御利益<sup>ごりやく</sup>に受け取りました。

「この人を捕まえておけば、パンがなくなっても、五つのパンと二匹の魚で五千人を食べさせてくれた。この人を捕まえよう。この人にすがっておれば、どんな病もみな癒える。死人も甦<sup>よみがえ</sup>る」

と。みんなそれを御利益としてしか受けとれなかった。本当の神さまの御意を受けとらなかつた。それがイエスの悲しみですね。

「そんなつもりでやったのではない。神の御意が何かということを受けとってほし



い。癒しを通して、今、目の前の救いを通して、その奥にある神の御意をしつかり受けとつて、そこに自分を委ねてほしい」

と、このイエスの意が伝わらなかつた。だから、十字架につけられた。けれども、復活されて、素晴らしい霊体となつて現れた。弟子たちに移り移つて、本ものをそれから作りだされていきました。そのおこぼれに与つていのが私たちです。そういう長い歴史の上に築かれた本ものの救いです。

ところが、宗教の歴史は悲惨です。教派争い、宗派争い、戦争、迫害。なんと人間の思いというのは、神・キリストの意に逆らうことばかりしてきているんだらうか。それはやはり己を立てようとするからです。

「己の主義主張、己の信仰、己の教義、これだけだ」

と言って他を審いていく。それでは絶対に平和はきません。本当に一人ひとりが、いと小さき者一人ひとりが、神の心を心として草の根で、そこから御意が芽を出し大きくなつていく。

「みんなが笑うて暮らせる世の中に」

という坂本龍馬の願いのようなことは、それではできません。上からではだめだと思えます。本当に皆さんお一人おひとりが、あの「龍馬伝」の「お元さん」みたいにマリアさまに拜んで、キリストにしがみついて、

「どうぞ、この小さき者を通して御意になりますように」

というその思いが、あちらこちらで捧げられていくときに、そういう民族は亡びないと思えます。神さまは滅ぼさない。それ以外のもの、武力に頼つたり、イデオロギーに頼つたり、お金に頼つたり、権力に頼つたり、そういうもので解決しようと思うと、それは相対的な押したり押されたり、殴つたり殴られたりという、そういう争いしかないように私には思える。ですから、所詮、地上では本当の御国は成就しない。

「みむねの成るはいずれの日ぞ、きたらせたまえ主よみくにを」

と、さつき「ガリラヤの風かおるあたり」という讚美歌(228番)を歌いましたが、御国が完成するのは本当に向こうの世界です。それでも、それはリアリティを持っていますから、そこで待つていてくださる。そして地上にいる私たちがいと小さき者であっても、天使たちが守つていてくれる。キリストのお弟子たちが守つてくれている。キリストに在つて召された者たちが、善き働きをしようと思つて、待ち受けてくれているんです。ですから決して、皆さん、

「自分は独りだ。自分は誰からも顧みられない。自分は病氣だ」

とかいろいろマイナス要因があるかもしれませんが、悲観しないでください。それを乗り越えて、

「私がついている。私がいるから大丈夫だよ」

とキリストは言葉をかけてくれる。「大丈夫だよ」というその言葉、



「平安なんじにあれ」

というのがそれなんですわね。

「心安かれ、我なり、懼るな」<sup>おそ</sup>

と。みんなキリストの言葉は「大丈夫だよ」と言う。この寡婦<sup>やもめ</sup>に語られたのもそうでした。

「息子さんが亡くなったからと、泣きなさんな」

と言って、本当に生き返らせてしまった。望みなきところに本当の望みを与えてくださる。これがあの時も今も変わりない。そして、人が人であるかぎり、民族とか人種とか国籍とか、そういうものを超えて、人を人として、人間として尊んでくださるのが本当の神さまでしょ。太陽は一つです。地球は一つです。太陽があつて、地球というものは在らしめられています、もう何億年も前から。太陽が消えたら地球は滅びます。神さまはそういうお方です。

「天の父は善き者にも悪<sup>あ</sup>しき者にも陽<sup>ひ</sup>を昇らせ、雨を降らせ給う。汝ら父の全<sup>まった</sup>きが如く全かれ」

と言われた。突き抜けた心のお方です。それは我々日本人に一番受けとりやすいのではないかと思います。穏やかな自然に恵まれて、争い事を好まない民族です。そういう大和民族<sup>やまと</sup>が本当にイエス・キリストの心を心として、一人ひとりがそれを自分個人の本当の救い主、助け主、導き主というふう<sup>きえ</sup>に帰依して、

「おつ、そうか、あなたもそうか。あなたもそうか」

と次々と結ばれていく。そういうもんです。私たちランニングの仲間もそうです。いろんな職種は違う。けれども、走ることにいて一つです。走ることで結ばれている。そういうのが多いでしょ。音楽で結ばれている方、いろんなことで結ばれている方、いろいろあります。私たちは、ここにおいでくださった方は、このキリストの心を心とする。キリストの心を心として、それに帰依していつて、

「主よ、あなたの御国<sup>みくに</sup>がここに成就しますように。御意<sup>みこころ</sup>が天におけるように地にもなりますように」

と、あの「主の祈り」を祈つていく、そういう群れ、そういう魂である。それでいいのではございませんでしょうか。そんな思いがいたします。この7章はそういうことを言っている。

「<sup>14</sup>…イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。<sup>15</sup>すると、死人は起き上がつてものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。<sup>16</sup>人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。<sup>17</sup>イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。」(ルカ7:14、

17)

それから続きましてこのルカ伝7章の18節。これは洗礼を施したあのヨハネ——イエスよ



りも6か月先に生まれてイエスの道案内をした、道備えをしたヨハネ——これがヘロデに捕らえられて、やがて殉教するわけですが、その獄中からイエスのもとへ弟子をつかわした。その時の状況です。イエスのなさっていることをヨハネは獄中で耳にする。

「自分の思っていたイエスとは違う。自分が思っていたイエスはもつと勇ましい武将であるはずだ。武将イエス。イスラエルをローマの支配から解放して、あのダビデ王国を完成してくださる、そういうイエスというものを自分は求めてきたのに、どうも違う」

と。それでこう言われた、

「<sup>18</sup>……ヨハネは弟子の中から二人を呼んで、<sup>19</sup>主のもとに送り、こう言わせた。  
「来るべき方は、あなたでしようか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」<sup>20</sup>二人はイエスのもとに来て言った。「わたしたちは洗礼者ヨハネからの使いの者ですが、『来るべき方は、あなたでしようか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか』とお尋ねするようにとのことです。」<sup>21</sup>そのとき、イエスは病氣や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。<sup>22</sup>それで、二人にこうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」<sup>23</sup>わたしにつまずかない人は幸いである。」 (ルカ7・18～23)

イエスが相手にしてこられた方々というのはこういう人たちであった。目の見えない人、足の不自由な人、癩病をわずらっている人、耳の聞こえない人、そして病氣で死んでしまつた人、それから貧乏な人。こういう人たちをイエスはことごとく救い上げていかれた。

「こういう私の心をヨハネはわかっていないようだ。私に躓かない者は幸いだ」と言われた。そして、18章にいきますと、また子供のことが出てきます。

「<sup>15</sup>イエスに触れていたいただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。さつきは子供でしたけれども、今度は乳飲み子まで連れてきた。」

弟子たちは、これを見て叱った。<sup>16</sup>しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」<sup>17</sup>はつきり言うておく。子供のようには神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」 (ルカ18・15～17)



## ●いと小さき者を顧み給う神 (ヨハネ9章)

今までのルカ伝。最後にヨハネの福音書から、9章をとりあげました。この9章というのは面白い所です。ヨハネ伝ではあまり病気の癒しということはたくさん出てこない。ところが、ヨハネ伝の中で光っているのはここだと私は思う。ものの見方というのはいろいろと違うということがわかる。今でもそうですね。生まれながらいろんな不自由な体<sup>からだ</sup>で生まれたとか、病気で生まれたりとか、いろんなことがありますと、

「これは何でだろう、何か先祖の祟<sup>たた</sup>りだろうか？ 方角が悪いのではないか、どこかで見てもらって祈ってもらったらどうだ」

とか、そういうことが多いではありませんか。この当時はもつとそうだったと思う。因果応報的な考え方です。

「さて、イエスはとおりがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。  
弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、  
だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

「生まれながらの盲人」ということだから、

「どうも本人ではなさそうだ。そうすると両親ですか、それとも先祖ですか。何か原因があつて、その祟<sup>たた</sup>りが、あるいはその罰がこういう子供に現れているに違いない  
ありません、先生、どうでしょうか？」

と。こういう見方ですね。それに対して、

「イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯した  
からでもない。神の業<sup>わざ</sup>がこの人に現れるためである。」」(ヨハネ9:1-3)

「神の御業<sup>みわざ</sup>がこの人において現れるためである」

と。理由らしい理由ではない。人は原因を求めたんです、

「何が原因でこうなっているのですか？」

と。ところが、イエスはそんなことは問題になさらない。

「この人の上に神の栄光が現れるんだ。この人の上に神の御業<sup>みわざ</sup>が現れ、それが  
神の栄光となる。そのことのためにこの人は負うべからざるものを負わされ  
ている」

ということなんです。私はそう受けとる。

皆さん、この「生まれつき」についてボヤキたいことがいっぱいあるかも知れませんが、

「もうちょつと親父<sup>おやじ</sup>がしつかりしていれば私はこんな目に合っていないのに。もうちょつと先祖たちがまともな生活をしてくれたら、こんな変な生まれ方はしなかったのに」

とか。また、いろんな不幸な生まれ方をなさる方もいらっしやいます。自分というものにつ



いて、あるいは自分の育ちについて、ボヤキたいことがいっぱいあって、それがまた不幸を生み出しているというのが世の中です。ドラマを見ていまして、もうそうです。

でも、そういうことについて、イエスの言葉は全く違う角度から言われています。過去のいろんな原因の追究ではない。

「今この人の上に神の憐れみが注がれ、神の御業が働きかけ、それが神の栄光となる。」

この人自身が神さまに用いられる器となる」

と。我々一人ひとりがキリストという方に出会いますと、そんなふうにキリストは見てくださる。

「どんな生まれ方をしようと、今どんな境遇にあらうと、出会うことによつてすっかり変わるんだ。すっかり変えてくださる。委ねなさい」

と。いと小さき者を顧み給う。この世で顧みられない人を神さまは抱き、助けたもう。それが御意、神の喜びたもうところである。これを本当に受けとつてほしいと私は願っている。

それが私の最後の叫びと言つてもいい。もし講演会がこれで終わるといたしましたら、私の最後の講演の遺言みたいなのが今日のお話なんです。どうぞ、自分の生まれとか、育ちとか、環境とか、運命とか、運不運とか、そういう我々をとりまくものに振り回されないで、それを突き抜けて捕まえてくださるお方に捕まえられてください。向こうから捕まえてくださるんです。「我々が信ずる」のではない。向こうから手を伸ばして捕まえて、

「もう離さないよー!」

と、これが神さまの御意なんです。捕まえられて、

「ああ、ありがとう!」

と言えるか。

「手を離してくれ、このイエスのバカタレ!」

なんて言うのはだめです。これはこの世的に立派な人、自信のある人、今満ち足りている人、今笑っている人は、イエスにつかまれたら、「手を離せ、バカタレ」と言うはず。ところが、

「ああ、よくぞ捕まえてくださった。私はもう死にたいと思つていた。ところが、

あなたが捕まえて、一緒に生きようと言つてくださるので、身を委ねます。頼みますわ!」

と。あの「よろしくたのみます」というのはいい言葉ですね。人間は挨拶しますとき、「よろしくお願ひいたします」と言う。イエスさまに対して、

「よろしくお願ひします」

「まかしときー!」

てなものですよ、キリストからいうと。そうでしょ。皆さん、誰でもご挨拶する時に、「よろしくお願ひします」とみな言つてますよね。向こうも、「こちらこそ、よろしく」とか言っているけれども。イエス・キリストに対して我々が、



「よろしくお願いいたします」

と本気で言ってください。そしたら、

「まかしとき、私が引き受けた。もう離さないよ!」

と。もうその時に背負われている、その時に抱かれているわけです。このお方に会って、このお方に本当に身を委ねてほしい。さきほどらい、詩篇の中でも、

「身を委ねます。叫びに答えてください」

とかあったけれども、全部それは私のそういう思いを込めて選んだ言葉です。

この9章に戻りますと、

「誰のせいでもない。神さまがこの方を使って素晴らしいことをなさってください」

と。何をなさるかという、まず唾で泥をこねて、それをこの見えない人の目に塗った。それ自体は実に馬鹿げたことですよね。普通の人から見たら、「あんたまでも私をおちよくるのか、もてあそぶのか!」と言いたいところだけでも、この人は黙ってます。

「さあ、あそこのシロアムの池へ行つて、洗いなさい」

と。「遣わされたる者」の池という小さな池で、長さが17メートルで幅が10メートルほどの池だそうです。ピッチャーのマウンドからベースまでが<sup>18.44</sup>メートルですから、だいたいそのくらいと思って考えるけれども、そういう小さな池です。

「そこへ行つて洗つてきなさい」

と。この人は

「はいっ!」

と言つてそこへ行つて目を洗った。そしたら、見えるようになった。素晴らしいですよ。行つたらそのとおりになった。

「<sup>7</sup>……そこで、彼は行つて洗い、目が見えるようになって帰つて来た。<sup>8</sup>近所の人々や、彼が物乞いであつたのを前に見ていた人々が、「これは座つて物乞いをしていて人ではないか」と言つた。<sup>9</sup>「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそのようなです」と言つた。<sup>10</sup>そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、<sup>11</sup>彼は答えた。「イエスという方が土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行つて洗いなさい』と言われました。そこで、行つて洗つたら、見えるようになったのです。」<sup>12</sup>人々が「その人『イエス』はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言つた。……<sup>13</sup>人々は、前に盲人であつた人をファリサイ〔パリサイ〕派の人々のところへ連れて行つた。<sup>14</sup>イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであつた。<sup>15</sup>そこで、フ

アリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」<sup>16</sup> ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。<sup>17</sup> そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

そこで、パリサイ人たちはこの目を開けられた人を迫害する。除け者にする。村八分にして追い出してしまふ。

<sup>24</sup> さて、ユダヤ人たちは、盲人であつた人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの方が罪ある人間だと知っているのだ。」<sup>25</sup> 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしにはわかりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」<sup>26</sup> すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」<sup>27</sup> 彼は答えた。「もうお話したのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞くとうなされるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」

ちよつと挑戦するようなことを言った。

<sup>28</sup> そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの方の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。<sup>29</sup> 我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの方がどこから来たのかは知らない。」<sup>30</sup> 彼は答えて言った。「あの方がどこから来たか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。」<sup>31</sup> 神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。<sup>32</sup> 生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。<sup>33</sup> あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならないはずです。」<sup>34</sup> 彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

除け者にした。そのことを知って、イエスが現れるんです。

<sup>35</sup> イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。<sup>36</sup> 彼は答えて言った。「主よ、その

方はどんな人ですか。その方を信じたのですが。」<sup>37</sup>イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」

「私だよ、お前の目の前にいるじゃないの」

と。彼は今までは見えなかった。もう見える。イエスがその目の前に立つてくれている。

「私はその方の弟子になりたい、信じたい、神から遣わされたお方でなければ目を開けるなんてできっこありませんでしょ」

と、彼はユダヤ人を相手にしてどうどうと証言していた。そのお方が目の前にいてくれる。これはもうびつくりするようなことがここ起こっている。

<sup>38</sup>彼が、「主よ、信じます」と言つて、ひざまずくと、<sup>39</sup>イエスは言われた。「わたしがこの世に來たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

イエスは救うために來られたはずなのに、ところが、ここでは裁くために來た。いったいどういう裁きなのか。本当は見えないのに、「見える、見える」と言い張ることがだめなんだ。本当は何もわかっていない。そのことを率直に認めて、

「主よ、この見えない私の目を開いてください。心の目を開いてください。私は肉眼は見えています、心の目、霊の目は閉ざされています。これを開いてください」

と。これが「救う」ということなんです。ところが人々は「見える、見える」と言い張るわけです。神さまの言葉を否定する。この人があんなにイエスのことを素晴らしいお方だと、

「神のお遣わしになった方でなければこんなことはできっこありません」と言つていても、

「モーセを信ずるけれども、そんな奴は信じない」

といつて蹴飛ばしている。これが「見える」と言い張っている姿なんです。

<sup>40</sup>イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言つた。<sup>41</sup>イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」(ヨハネ9:7-41)

と。私はここが大好きなんです。いわゆる宗教家とかは、

「モーセだ、モーセだ」

と言つて、そしてイエスを審さばいている。

「安息日を破る、己を神と等しくする」

と言つて、イエスを審さばいて十字架につけて殺す。民衆は彼らに煽動されて、あの救われた民衆たちが掌てのひらを返すようにして、

「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ！」



と言って、狂ったように叫びましたね。いかに人間というものはだめかということです。それらを全部、イエスはひつかぶって、

「父よ、彼らを救<sup>ゆる</sup>したまえ」

でしょ。そして、すべての人を救い上げようとされた。この姿です。

### ●我々日本人は共感できる

だから、向こうの世界では、さつきから見てきましたように、心の砕けた者は、

「私は何もわかりませんでした。私は愚かでした、見えない人間でした、自分の中に救いはありませんでした。だのに、自分は自分で強い強い、立派だ立派だと思いがつていました。どうぞ、そういう思い上がりをお赦してください。本当にあなただけが素晴らしいお方です。私を弟子にしてください」

と。あの「放蕩息子」は、

「自分は子供と呼ばれる資格はない。召使<sup>めしつかい</sup>としてこき使ってください」

と言った。ところが、お父さんは、

「いやいや、お前は死んでいたのに生き返ってくれた」

と言って抱きしめた。そういう世界が神さまの世界なんです。そういうものに我々日本人は共感できると思うんです。

「キリスト教だ、やれ何々だ」

という先入観を捨てて、そのものだけを見ていきましたならば、

「あつ、これこそ我々がずっと求めてきたものではないか。我々は日本人の心で、日本人のハートでそれを受けとって、私たちもキリストの弟子、いやキリストのお友達として、キリストが「友よ」と呼んでいただくような生き方をしようよ」

と、これでいいんじゃないでしょうか。その上で仏教だって結構ですよ。ご先祖を大事にされて結構ですよ。

「ただキリストだけで、あとは全部捨てなさい」

なんて宣教師は仰いますけれども、そんなこと言わんでいい。仏壇は大事になさっていいですよ。お盆やお彼岸になれば先祖が帰ってきてくれる。大事になさったらいい。みんなひつくるめて、神さまは大切に大切に思ってください。魂がキリストの心を心とする。

「キリストの心を心とする」

という人をキリストは大事にしてください。それが

「いと小さき者を顧<sup>かえり</sup>みたもう」

という姿です。我々、皆さんが、一人ひとりが、

「ああ、自分はいと小さき者です、いと小さき者でよかった。でなければ、思い上



がって、躓いて、とうとうあなたとは、生きている限りご縁を結ばれなかったはずです。けれども、あなたとご縁を結ぶことができて、本当に幸せです」

と。こういうふうに、できれば若いときからそうなってもらえばいいんですね。年取ってからはあとが少ないですから、働くにしても。若いときからそれに目覚めて、人生の希望<sup>のぞみ</sup>とは何か、成功する人生とは何か——何か賞をもらったり、それも立派ですよ、ノーベル賞も立派ですよ、いろいろこの世のことに役立つことは立派ですけれども——それらを超えて、本当にその生き方そのものが、ハートが神の心を心とする。そういうハートで、

「自分のやることが神さまの、キリストの喜び給うようなことのために、私をお用いください」

と。人はみな才能があるんです。

「その才能を神の喜び給うことにお用いください」

という、その祈りをもって日々を過ごされましたら、きつと道が開けてくる。

今はどこを見ても、日本は八方塞がりでしょ。政治の世界も、外交も国内の課題も、それから経済界も、そういう中で希望が持てないところでこそ本当のものに目覚め、そして

「これだ、これで行くー!」

という、そのチャンスをそういうふうを受けとっていただきたいんです。そして、それを実証していく。

「40年間、奥田先生にだまされてきたけれども、あれはだましではなかった、本ものだった」

と、そういうふうに言っしてほしい。その時には私はもういませんけれどもね。そういうことを私は心から願っています。ですから今日、ご年配の方々と来られた方は若い人たちに私の思いを伝えてほしい。若い人で共感された方はお友達に、

「こんな話を聞いたんだよ」

と言って、共に本当の意味の実りのある人生を送っていただきたい。これが私の皆さんへのお願いです。それでは、これで終わります

## ● 祈り

それでは短くお祈りをさせていただきます。

主イエス・キリストさま、キリストを遣わ<sup>つか</sup>してくださった父なるおん神さま。そして今、聖霊という姿でこの会場に充満してくださっている御霊<sup>みたま</sup>の主さま。こんなにたくさんの方々をこの会場に呼び集めてくださって、本当にこの僕<sup>しもべ</sup>を通して、あなたの御意<sup>みこころ</sup>の一端を語らせていただいて、ありがとうございます。

主さま、古代から今に至るまで、またどの民族におきましても、あなたはそれぞれに時に応じて、あなたの御意を示し、時には仏教という姿で、時にはまた別の宗教の姿で、あなた



の御意を示して来られました。

しかしながら、それは必ずしも正しく受けとられず、今もなお宗教上の争いが絶えません。また、領土の奪い合いとか、侵略のし合いとかいうことがますます烈しくなつて、軍備のためどんなに莫大な富が使われているか。その片一方では、飢えに苦しみ死んでいく人がたくさんいます。また、生きている人の中にも本当の望みがない、実に惨憺たる地上の世界でございます。

しかしながら、主さま、あなたはこんな世をそのまま捨て置かれるはずがありません。こういう時だからこそ、あなたは御名を呼ぶ者、あなたに最後の救いを求める者を絶対にお見捨てにならないで、<sup>ただ</sup>義しい<sup>さばき</sup>審判をなし、義しい道へと人を導き、あなたの心を心とする者を守ってくださいます。

どうぞ、今日ここに集<sup>つど</sup>つてくださった方々が本当にそのようにあなたの心を心として、日々の生活においてそれを実証して行つてくださるように。まず家庭の中から本当の和をつりだし、職場においてもどこにおいても、あなたの心を心として実現していくことができますように、おん助けください。御名を呼ぶ者を決してあなたはお捨てになりません。

どうぞ、一人ひとりにおいてあなたの御業が現れ、ご栄光が現れますように。今日ここに来れなかった方々をも、どうぞ、顧みてください。この祈りを、皆さまのお祈りと合わせ、主イエス・キリストの御名<sup>みな</sup>によつて今、御前<sup>みまえ</sup>にお献げいたします。アーメン。

